

東亞醫學

先哲醫訓復唱

用方簡者、其術日精、用方繁者其術日粗、世醫動輒以簡爲粗、以繁爲精、哀矣哉。

〔訓譯〕

方を用ふること簡なる者は、其術日に精し、方を用ふること繁なる者は、其術日に粗し、世醫やもすればすなはち、簡を以つて粗となし、繁を以つて精となす、哀しいかな。

欲得活路者、必陷死地、欲陷死地者、必得活路。

〔訓譯〕

活路を得んと欲する者は、必ず死地に陥り、死地に陥らんと欲する者は、必ず活路を得。

醫之臨劇病也、欲使彼活於我手者、愛我也、欲使彼死於我手者、愛彼也、愛我者、終不能盡我矣、愛彼者、誠能盡我、古語曰、不入虎穴、不得虎子、余於醫亦云。

〔訓譯〕

醫の劇病に臨むや、彼をして我手に活さしめんと欲する者は、我を愛するなり、彼をして我手に死なさしめんと欲する者は、彼を愛するなり。我を愛する者は、終に我を盡くす能はず、彼を愛する者は、誠によく我を盡くす。古語に曰く、虎穴に入らずんば虎子を得ずと、余醫に於ても亦云ふ。

第四十號要目

◆投稿規定◆

讀者各位の投稿を歓迎す。
題目、内容は時事、學術、文藝其他隨意。
長さは一〇〇〇字以下とす。

○中國の漢方を訊く

編輯部

- 急性肝臟肥大に消痔飲 矢數 有道
- 當歸四逆加吳茱萸生薑湯の 治療 大塚 敬節
- 治療報告 矢數 道明
- 刺鍼過誤問題の取り上げ方 竹山 晉
- 桂枝は桂の桂皮 清水藤太郎
- 潔癖症漫筆 荻里 人
- 治療實例 葉橋泉原著

下痢病の口訣

湯一服で癒る風邪にも、咽喉にルゴール氏液を塗り、胸に濕布をし、頭に氷嚢をあて、足に湯たんぽを入れ、しかもその上に吸入をかけ、薬は水散二劑の外に、頓服まで貰つて、それで漸く満足する。簡單だと不安に思ふ心理があり、かゝる心理が滔々として現代を風靡してゐる。

☆ 第二條と第三條とは同じことを云つたものである。諺に、身を捨てゝこそ浮瀬もあれ、といふのがあるが、かゝる境地が、こゝに述べられてゐる。危篤の病人の治療に際して、捨身になり得る醫者は、患者を眞に愛するのである。普通のあたりさわりのない治療をしてをれば、必ず死ぬと決つた病人に、思ひ切つた治療を施す際に、其病人を自分の手で殺す覺悟がなければ斷乎たる處置は出来ない。こゝに醫治に於ける背水の陣が數かされるのである。しかし病家が心からその醫師を信頼して、一切を委ねて後悔しないと云ふ態度が、そこに出来て来なければ、醫師としては背水の陣は敷けないのだ。この先生の手にかゝつて死ぬなら死んでもよいと云ふ覺悟が病人にあつて、そこに始めて醫師と患者との眞劍な魂が觸れ合ふのである。かゝる境地にあつては、何の後悔も残らない。

生薑瀉心湯は脇下水氣あり腹中雷鳴下痢が泄瀉に用るとき目的なり。病人に臍腹の方から下る様など云ふに、瀉心湯の行く者あるものなり。是腸下水氣ありと云ふ者か。

甘草瀉心湯は穀化せず雷鳴下痢が目的なり。穀化せずして雷鳴なく下痢するものならば、理中湯、四逆湯などの行く處なり。

桂枝人参湯は裏裏が目的なり。痢疾に一種最初より此方を用ふるあり。然れば痢病には最初に發汗し下すべしとは云はれぬ也。其症は脈緊腹痛もなく、血もなく、惡寒はげしく、脈緊なるものは此方に於て弛むものなり。

中國の漢方を訊く

—軍醫中尉本多精一氏 凱旋祝賀會にて—

戦地より度々本誌に寄稿された軍醫中尉本多精一氏がこのほど日に出で凱旋されたので本協會は去る二月二十二日比谷松本樓に於て本多中尉凱旋祝賀會を催した。本多氏は日支事變勃発するや未だ不擴大方針に活躍度々危険な目に遭ひ九前戦に活躍され、無事任務を果して歸還された。氏は多忙な軍務の中に在つて尙漢方の研究を怠らず戦地に在つてマラリヤに漢方を用ひて大いに成績を挙げられた事(先頃報知新聞に報道された如く)であり、又歸還前に中國の名醫葉橋泉氏を親しく訪ねられてその報告は本誌第十一號に掲載し、通りであつた。當日先づ大塚敬簡氏の開會の辭に次いで本多氏と同意で葉橋氏を呼ばれた本村長久氏の紹介挨拶があり、それより本多氏の中國の漢方土産物が始まつた。この日本多氏の座談は大體次の通りであつた。

—本多氏談話概要—

先づ私も聖戦に参加する事が出来て大變満足でありました。戦地へ行きますと仲々軍務が忙がしく、軍務に差支へない程度に研究してみたいと思つてゐた漢方も初めの中は容易に餘暇が得られませんでした。然しその中に少し暇を得ましたので漢方を試みる事が出来ました。いろいろとお話し度い事は澤山ありますが今日はこの東亞醫學協會の御招きにあづかつた事でありますから、本協會の主旨であります日支文化の提携と云ふ立場から私は先づ中國の名醫葉橋泉

氏をお訪ねした話を申し上げます。私が葉橋泉氏を訪ねた詳細は既に「東亞醫學」に先頃書きました通りであります。あれに書かなかつた事で葉橋泉氏から受けた偽りの無い私の印象を申し上げてみます。支那は今醫學に關しても大變革の起らんとする時でありませう。その意味でその中に在つて葉氏は非常に努力して居られ、肉體的に身を投げ出して働いて居られます。支那の現在醫學界の空氣は恰も我國に於ける明治初年漢方を排撃した時のその如きものがありまして、支那は今漢方衰亡の危期に立つてゐるのであります。この時に當り葉氏は死ぬといはれないと云ふ猛烈な勢ひで研究をして居られます。現在支那では醫者が事變の爲め土地を離れて何れかへ避難してゐて歸つて来ないのではありません。この時に當つて葉氏は敢然土地に留まつて醫業を開いて居りますのでそれだけに又大變多忙なのであります。

私が葉氏をお訪ねした時患者は澤山来て居て非常に忙がしい中でありましたが氏は大變心よく款待してくれました。私は親しく氏の診察室で氏の診察振りを見學する事が出来ました。氏は診察を終ると私を案内して氏の病院を見せられました。入院患者もあつて、内科、婦人科、小兒科などの室があり、藥劑部には漢藥を乾燥させる電力の設備などもあつて凡て仲々完備してゐるのには驚きました。こゝで申し上げなければならぬ事は葉氏の研究方法であります。

が、氏の目的は、從來の中醫、國醫のやつてゐる生藥の行き方ではないと云ふ考へもあると思ふので、葉氏は現代醫學的に凡ての藥物を新しい行き方で研究してゐます。つまり一つ一つの藥物の效能、性質等を考へ調べて行く方法であります。然し或二、三の藥物は結合したものに依つて始めて効果のある事は充分知つてゐられますが今は一つ一つの藥物を純漢方的に調べて行き度いと、さうしなければ現代の支那の中醫、國醫の發展性が無いと考へてゐる事です。その様に氏は藥劑の一つ一つが大變熱心に検討してゐられますが、又臨牀的にも仲々堂々たる態度を堅持して居られ、私が診察室に居ります時など、這つて來た患者を二人の前に置いて二人で診察してそれに就いて討論しようではないかなど云つて居り、氏は何れ近しい中に日本へも行き度いが行つたら日本の漢方醫學のお歴々に逢つて臨牀討論を試み度いと仲々自信を持つてゐられます。

そこで私は文學の交換のみならずさういふ偉い人に來て貰つて實際治療に當つてデイスカッションする事は又よい意味の日支文化提携の實を擧げる事になると思つたので是非日本を訪ねられ度いと葉氏に申しました。

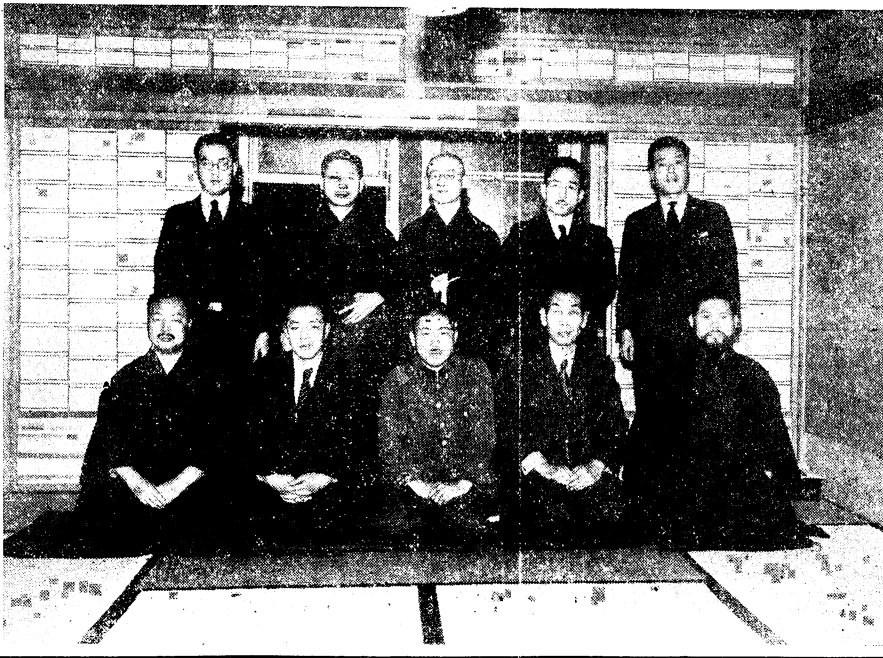
葉氏の話はその位にして次にマラリヤの話ですが、マラリヤに就いては實は私共學校時代にはマラリヤには鹽酸キニーネが特效藥となつてゐましたので別に何も教はるところも無く出たのであります。ところが今度戦地に來て實際にぶつかつてみまるとマラリヤには鹽酸キニーネと仲々さう簡單には片づかない事を経験したのであります。又支那では事實マラリヤに鹽酸キニーネは用ひてゐないのではありません。マラリヤの療法として常山草葉を用ひる事があります。

で私もそれを經驗しました。これを服むとネムリを催し一寸發汗したのが翌日三十七度五分位ひあつたその状態が三日程續いて平熱になりそれ以來マラリヤは出なかつたのですが、一方鹽酸キニーネをやりますと四、五時間して發汗し翌日平熱になります、即ち鹽酸キニーネの方は高熱をグツと下げますがその後一週間か十日で又一寸三十七度位に上り食欲が無く、身體が弱つて倦怠が長く續きその中腹を悪くしたりして鹽酸キニーネ丈だと快復迄に少くも半月或ひはそれ以上もかゝります。そこで私はマラリヤに小柴胡劑加減を鹽酸キニーネと併用して試みましたが、するや治療日數も半減し、復が早く之は病後の戰慄能力にも影響のある事で大變成績のよい事を経験しました。その他漢方の藥方も試みてみましたが相當の成績でしたのでこれ等の報告は軍當局にも出して置いた次第であります。

マラリヤの疑ひがあると先づ戦地では採血して病原蟲の有無を探索しますがそれが仲々發見困難で八十%は不定と云ふ有様なのです。血液検査や沈降速度を計つたりしますが科學的に調べて原蟲のある事が判れば勿論ですが發見出來なくてもそれらしい症状を呈する者はマラリヤにしてはふと云ふ状態です。そこで或ひは我々の思つてゐるマラリヤは事實マラリヤではなくて何か支那の特有の別の風土病の如きものではないかと云ふ疑ひも一應考へられるのです。又一口にマラリヤと云つても地方に依つてその毒素が違ふので中支、南支、エチオピア、アフリカ、シシゴールのマラリヤではその毒力が違ひはせぬか、北支にはマラリヤは無いと聞いてゐますが、中支、南支と南へ行く程マラリヤの毒力が強いのではないかと云ふ事

も云はれてゐます。そんなわけでマラリヤに對する研究は未だ充分と云ふわけには行かないのでありまして、マラリヤ撲滅策がいふと切に御願ひする次第であります。大體以上のような本多氏の話が終

部へ福音をもちたらしめていたゞ度いと切に御願ひする次第であります。



寫眞 向つて右前列より、矢數(道)、清水、本多、木村、柳谷、後列、氣賀、大塚、小田、矢數(有) 龍野の諸氏。 日比谷松本樓に於て

そこでこの問題は我が漢方に於きましても大いに研究して何か貢献するところを得たいものと希つてゐる次第であります。皆さんも掲載の寫眞の通りであつた。

急性肝臓肥大に消瘕飲を與ふ

矢數 有道

今でも確たる診断を下すことは出来ないが、肝臓肥大を顯著に示した小児病を見事に治したことがある。

拒絶された、といふ次第である。しかし病院の宣告にも拘らず、素人目にはそれ程危篤とも見えな

病歴に就て家人の言を聞く、約十五日程前突然に高熱(三十九度五分位)を出した。近所の醫者に診て貰つたら胃腸障害だといつて治療を受けたが下熱しな

舌を診ると少々赤く裸になつてゐる。脈は特記すべき變化は認められない。聴診すると呼吸音は荒い



腫脹してゐる。肝臓の如く上腹部全體に腫脹してゐる。境界は明瞭である。壓痛はない。脾臓の腫脹は認められない。

以上の所見であるが、病名の適切なものが頭に浮むて来ない。他の病氣によつて招來された肝臓肥大か、或は原發性のものなのか判断のしやうがない。

先づ小柴胡湯が考へられるが筆者は使はなかつた。といふのは本病の様に肝臓肥大を呈出してゐる小児の病氣には後世方で名方があるからであつた。

の大きさに縮少してゐた。十日目往診、今日は肋骨下一横指位に觸知出来る程度で全治も同様である。十五日目も同様の容態で離床

當歸四逆加吳茱萸生姜湯の治験四例

大塚 敬節

當歸四逆湯に吳茱萸生姜の二味を加へた方劑が、當歸四逆加吳茱萸生姜湯であつて、傷寒論には、その運用の基本を、次の如く示してゐる。

患者は十九歳の男子であるが、某家の職人をして、一日中、板の間に坐つて仕事をしてゐる。

そこで私は、内に久寒ありと認定した四例の患者に、此方を用いた治験を掲げ、久寒とは如何なるものであるかを、考へてみたいと思ふ。

患者は三十三歳の婦人で未婚。身體は瘦せて、色の白い方である。主訴は肩凝りである。殊に右がひどくて、手紙一本を書くことすら困難である。その他に頭重、目眩があり、食欲も少く、睡眠も十分にとれぬといふ。小便は近く、大便は一日一行。手足は冷え、脈は細である。月經は遅れがちである。此の患者は最初に半夏白朮湯を

第一例

患者は三十六歳の婦人で、稍々瘦せた脊のあまり高く、なる方である。結婚後既に十数年になるが、一回も妊娠したことがないといふ。患者の主人は有名な壽司屋で、非常に多忙なため、此の患者も仕

患者は三十三歳の婦人で未婚。身體は瘦せて、色の白い方である。主訴は肩凝りである。殊に右がひどくて、手紙一本を書くことすら困難である。その他に頭重、目眩があり、食欲も少く、睡眠も十分にとれぬといふ。小便は近く、大便は一日一行。手足は冷え、脈は細である。月經は遅れがちである。此の患者は最初に半夏白朮湯を

第二例

患者は三十三歳の婦人で未婚。身體は瘦せて、色の白い方である。主訴は肩凝りである。殊に右がひどくて、手紙一本を書くことすら困難である。その他に頭重、目眩があり、食欲も少く、睡眠も十分にとれぬといふ。小便は近く、大便は一日一行。手足は冷え、脈は細である。月經は遅れがちである。此の患者は最初に半夏白朮湯を

患者は三十三歳の婦人で未婚。身體は瘦せて、色の白い方である。主訴は肩凝りである。殊に右がひどくて、手紙一本を書くことすら困難である。その他に頭重、目眩があり、食欲も少く、睡眠も十分にとれぬといふ。小便は近く、大便は一日一行。手足は冷え、脈は細である。月經は遅れがちである。此の患者は最初に半夏白朮湯を

治験報告

矢數 有道

一、猛烈な下肢痛に甘草附子湯

患者は二十八歳の婦人で、子供が二人ある。主訴は、水様の鼻汁が多く出て、耳鳴、頭重を訴へ、脈細である。手足の冷感は勿論甚しい。そこで當歸四逆加吳茱萸生姜湯を與へる。服薬四週間に於いて鼻汁の流出止み、頭重、手足の冷感等も去つたので、半ヶ年程服薬を止めてゐた處、今度は、腰脚の冷痛を訴へて、再び來院した。よつて再び前方を投ずるに、腰脚大いに温まり、疼痛も消散した。

余の友人の子で、八歳になる女児が、約一週前程前から風邪氣味で、扁桃腺が腫れ、三十九度を超える熱發であつたが、昨日より急激に兩下肢に猛烈な疼痛を訴へ、絶対に歩行不能となり、昨夜は疼痛のため一睡もせず泣き明かしたといふ。余は相當難症の豫感を以て早速往診して見ると、二三日來腹部膨滿して下痢便が一日二、三回あつたことである。脈は浮んでゐて頻數し、弾力は相當ある。腹は觸れない。舌苔が白く、かつ、幾分口渴を訴へる。皮膚は濕つてゐて、微しく發汗してゐる。この時はジツトしてゐれば痛みはないらしく、體温は三十八度三分であつた。幾分咳嗽があつたが胸部の所見はない。小便は少々少く、様であるが、小便の時は兩足を縮めて泣き叫び、母親が抱きかかへて赤子の様にして漸く便器にかゝるとのことだ。試みに疼痛の箇所を調べんとして、足を見やうと告げると患者は遠かに顔をしかめて泣き出し、布圍を除いて手を近づけるとするや、痛く、痛く泣き叫ぶ。手を觸れることが出来ない。望み見たところではどこにも發赤も腫脹もない。

患者は十九歳の男子であるが、某家の職人をして、一日中、板の間に坐つて仕事をしてゐる。主訴は腹痛であるが、全身が寒く、冷へると直ぐ腹痛が起る。そんな時、風呂に入つて、温まると一時疼痛が去る。大便は一日一行で、食欲は少い。患者の顔貌を一見しても、如何にも寒さうである。脈は沈細で、腹滿がある。

此の患者には、始めに大建中湯、人參湯、附子梗米湯、桂枝加附子湯等を投じたが、效なく、當歸四逆加吳茱萸生姜湯を與へるに至つて漸く、效顯著し、服薬三週間に於いて全治した。

當歸四逆湯は、當歸桂枝芍藥甘草大棗細辛木通の七味よりなり、桂枝湯中の生姜の代りに當歸細辛木通を入れ、特に大棗を増量せるものと見ることが出来る。吳茱萸生姜湯と仲のよい藥物で、吳茱萸湯の場合も、温經湯の場合も生姜と一緒に用ゐる。

ハイネメチン氏病、脊髄性麻痺の症狀に、初發突然發熱三十九度以上、脈搏頻數、多少の扁桃腺炎、氣管炎、消化不良症ありと。余は頗る本病を疑つたが「風濕相搏」、骨節煩疼、掣痛、屈伸するを得ず、之を近くれば則ち痛み劇し、汗出で短氣、小便不利、惡風

衣を去るを欲せず、或は身微腫の者』に従つて甘草附子湯を擬した。

甘草一・五 朮三・〇 桂枝二・〇 附子〇・五

右水二合を以て一合に煎じ、三回に分服せしむ。

服後後疼痛漸時に緩解し、三日目には殆んど苦痛なく五日分を服し終つて容態を報告して云ふ、既に平熱となり、食も平常に復し、頻りに外出を欲すと。余は本病の眞にハイネメデン氏病であるか否かを詳かにし得ないが、猛烈な彼の疼痛が短時間内に緩解し、平常に復し得たのは、本方の効果に依つても多きを認め得た。

二、腎臓炎に清肺湯

一婦人、年四十三、十日ばかり前突然昏倒し、昏睡状態を續くること二時間に及び、近所の内科醫の診察によつて、尿毒症と云ふ診斷を下された。本患者は一年位前より咳嗽喀痰を訴へてゐたといふが、以來咳嗽呼吸困難甚しく、頭痛、小便頻數、發熱三十八度、全身倦怠を主訴としてゐる。脈は沈んで力なく頻數で、腹はいかにもたよりなく陥没し、臍中の動悸が充進してゐる。皮膚乾燥して全く生氣がない。胸部を聴診して驚いたことには左肺全面に水泡性雜音が著明に聴取され、右側後面にも大水泡音がある。患者は三年前、その娘が肺結核で市の療養所に入院したとき、約四ヶ月間その臨終迄看護に從事したことがあると思ふ。私は正しく傳染したものと推した。且つ尿の検査によれば恰も米のとぎ汁の如き甚しい蛋白を認める。

私は之を肺熱痰盛の候となし、最も苦痛とする咳嗽喀痰の標を治すを先とすべしと同春の清肺湯を処方した。

桔梗、茯苓、陳皮、桑白皮、貝母各一・〇、薑、杏仁、山梔

子、天門冬、麥門冬、五味子各〇・七、甘草〇・五、黃芩一・二、竹茹〇・七

以上一回量一日二回。

患者は生活が豊かでない、どうしても無理をし勝ちであるので保養食戒を嚴重に申渡した。服薬一週にして再來した時、患者の顔色は全く甦つた様に生氣をとり戻してゐた。咳嗽は殆んどなく、聴診するとあの著明なラッセルが八分通り消失してゐる。検査して更に驚いたのはあの夥しい蛋白がすっかりなくなつて綺麗に澄んでゐる。以來一ヶ月半引續き同方を服用してゐるが、近頃では室内の仕事位はしても少しも疲れないと云つてゐる。麥門冬湯が利尿作用として働くことがあるといふことをいつか聞いたことがある。この例は肺の熱を清解して、腎水の濁濁を澄ましめたもので、標を治して本が癒つた妙機に感嘆した。

三、吃逆に四逆加人蔘湯

人蔘湯

七十二歳の男子、外出先にて卒倒し、尿毒症の診斷で某病院に入院した。發病三日目から吃逆を發して止まず、食を絶つて益々衰弱を加へるといふ。私が診たのは發病十日目である。なる程ひどい吃逆で丁度呼吸毎に吃逆を發する、それも力のない絶えなるとする吃逆である。患者は口を開いて半ば昏睡状態である。呼ばば眼を開く。脈は割合に力があるが、これは慢性的腎臓炎があつて血壓が高い、浮腫であるから樂觀は出来ない。浮腫て之を按ずると散大にして無力といふ感じで、生氣散逸の徴である。腹は十日も食事らしいものを攝らないから舟の底の様に陥没して、臍上より巨大な動悸が心下に突き上げて來る。陽氣正に盡きんとするの狀である。體溫は三十七度二分、口渇あり、小便は飲みも

の、刺に多い。私は陽氣散脱の候として四逆加人蔘湯に蛇足ながら柿蒂を加へて與へた。

刺鍼過誤問題の取りあげ方に就て

竹 山 晉

東亞醫學第十三號に於て、東邦醫學編輯者の「刺鍼過誤問題」の取りあげ方に就て批判されてゐるが、それによると

——第三者の立場より之を眺むる時は、今少しく此問題が謙虚に學術的に展開されるべきであらうと思つた。開き、評者は新聞や雑誌のメシを喰つたこのない人間で、チャアナリズムの本質が、どこにあるかを會得しておらぬ御仁だと考へられる。取りあげた問題に讀者が興味を持たぬやうな方法で取りあげたのである。興味は、その問題を理解しようとする慾望をそゝる第一歩だ。興味をそゝられぬ者は、それ以上は各自、それ／＼にその問題の核心を掴む方法を取ればよい。興味をそゝり、問題の所在を明かにし、問題の性質を理解せしめ、方向を示せば、それから先は讀者各人の要求に従つて、より一層深入りすべきである。それ以上はチャアナリズムの領域を越へて居り、チャアナリズムの限界が、そこにある。

おおよそ、定期刊行物は、それが日刊と週刊と月刊とを問はず、一切の問題をチャアナリズムに切りあげるのを常道とする。その時、その場合に問題となつてゐるもの、問題となるべきものを、單に報道としてあれ、解説の型であれ、批判の形式であれ、研究の様式であれ、それを取り上げて、その時の問題として關係者を勿論一般の注意を喚起して、そこに興味を起し、問題の所在と方向を、とにかく明かにしてやるのが定期刊行物の編輯者の取るべき態度である。

この態度をこそ、チャアナリズムの態度と稱するので、この態度そのものを否定されては定期刊行物の編輯者の使命は無價値に終る。——ジャーナリスチックに、興味本

煎じ、三回分服。服用後漸時に吃逆漸まり、五日にして全く治した。意識も正常に復し、食慾も充分ではなないが攝取する様になつて、その後十日ほどで退院自宅で療養してゐる。

昭和十四年度 拓大漢方醫學講座講義頒布

一、傷寒論、金匱要略解説(一一六頁) 大塚敬節

二、傷寒論、金匱要略階梯(十五頁) 大塚敬節

三、漢方治療各論(一〇五頁) 木村長久

四、後世要方解説(三十七頁) 矢數道明

五、漢方治療各論(六十六頁) 矢數道明

六、漢方醫學總論(八十六頁) 矢數有道

七、漢方藥物學講義(七十三頁) 清水藤太郎

八、漢方醫學史講義(八十一頁) 龍野一雄

九、鍼灸兪穴學、治療學講義(一三三頁) 柳谷素靈

十、經驗藥方分量集(十一頁) 柳谷素靈

右十冊ノ中七、十ヲ除ク以外は全部増補改訂版、全揃金拾圓也にて希望者に頒布す(送料當方負擔)

東京市牛込區新小川町二ノ七(溫知堂内)

東亞醫學協會

電話牛込(34)二七七二番 振替東京一一九、四三〇番

めたに就ては、問題の提起者龍野一雄君の問題提出の態度に、その「起因されてゐる。謙虚に、學術的に」あの問題を出せばならぬかつたのは龍野一雄君であらう。あの提出の仕方は學術的ではあるが、どこに學問的態度があるか、そして、どこに謙虚さがあつたらうか。

東亞醫學の編輯者は、龍野君の一文が、單に井上、戸部兩君のみならず、鍼灸界の一部に翕然として感情的反撥を起さしめたことを、現實として知るべきである。その現實をも一般に感知せしめるために、あの問題を中心に關係者達の感情が如何に渦巻きつゝあるかを表現するのがチャアナリストの取るべき態度である。

何故に、斯くの如く、學問的に論じ盡さればならぬ問題に感情が伴つたか——の解答も、そこになされてゐるのである。それは、言ふまでもなく龍野君の態度に謙虚さと眞の學問的態度がなく、チャアナリストすら嫌ふところの「チャアナリスト」な根生と學問的態度とが彼の内に在るからである。

評者が「チャアナリスチックに、興味本位に」と言つた意味の「ジャーナリスチック」とは正しい意味での其れでなく、學問的の反對語として輕蔑的に一般に使用される場合の如くに使用してゐるやうであるが、それならば東邦醫學編輯者のジャアナリスティックな態度を正しく受け取ることの出来なかつたためである。

東邦醫學編輯者の同問題の取りあげ方の意圖は、チャアナリスティックで、しかも興味もあり、學術的にも一應參考となるべきものとの萬全の策を取らうとしたことだけには事實である。

第一に、學術的參考として柳谷素靈君の「諷刺私考」を掲げた。第二に、問題の提起者龍野一雄君

が、同問題を取り上げた態度、並に同君の學問的態度、同時に同君の「人間」に對して鍼灸界の一部に感情的反撥のあることを事實として認識した編輯者は、それを具體的にあるがまゝ反影させることによつて、問題の提起者の態度、人間性が、如何に學問的に冷靜に論じ合ふべき問題をさへ感情的にするかを示さうとして、戸部、井上兩君に素直にその表白を求めたのである。第三には、斯る場合必ず存在する折衷的常識論として、感情的でもないが、學術的でもない態度を取る者のあることの證左として保壽齋一郎君の一文を採録したのである。そして、第四には、問題のよつて起つた原因を示すために東亞醫學紙に掲載の全文を再録しておいたのである。

以上が、東邦醫學編輯者の、同問題を料理あげたチャアナリスティックな料理法である。

するの功あり」云々としてゐる、又蔣玉伯氏著「中國藥物學集成」にも「桂樹の枝を採取し粗皮を去り其最も薄き者を用ふ」とあつて方劑に「桂枝」とあるものは桂枝湯でも葛根湯でも桂の枝の皮去りを用ひてゐる。

桂枝の氣味は辛温である、辛温の性は枝は甚だ弱くして枝皮が大に優る、故に辛温の效を求めんとせば必ず皮を用ひなければならぬ。

方書は桂枝を桂皮なりとするは香川修庵の一本堂藥選を初めとして我國の著者の皆是なりとする所であつて方劑に「桂枝去皮」とあるは桂皮の粗皮を去ることであると、山田正珍著「傷寒論集成」にも「按ずるに金鑑及錢漢は去皮二字を刪去して其説に曰く桂は其味が皮皮にある、若し皮を去ると曰はば則ち木心のみであつて何の氣味があらうや藥に入る可からず、之は所謂「皮を去る」とは惟だ甲錯して無味の粗皮を去るの謂なるを知らないののである」と、又屠蘇齋の「方技雜誌」に「桂枝はもと別案の如く年々枝を刈り皮をむきたるならん、もし然らば桂枝と呼ぶも其義通ぜざるに似たり、香川太沖が桂皮と改めしも其理あるに似たり」と記してゐる。

故に曰く方書の桂枝は桂皮の辛くして甘きものを用ふべし、今支那にて枝を用ふるは誤りである。

因に支那の方書や醫學大辭典、藥學大辭典等何れも「桂皮」の文字を見ない、私が杭州の胡慶餘堂に於て桂皮を注文したら私が書いた注文書の「桂皮」の「皮」を朱筆にて消し桂の上に玉字を朱書して「玉桂」と訂正した、そして一錢(約三、ニグラム)の代價が一圓であつた。

本協會食養部主任の小出壽先生は、毎朝四時に起床、直ちに明治神宮に參拜し、みそぎの行を毎日實行してゐる。小出先生曰く、みそぎをやる様になつてから、鼻かぜ位はひかぬが、決して熱の出る様な風はひかないと。因みに小出先生の食養に関する基本的事項を記載せるものに、日本食養立言の一書がある。定價は一圓。御人用の方は本協會まで御申込み下さい。

本協會食養部主任の小出壽先生は、毎朝四時に起床、直ちに明治神宮に參拜し、みそぎの行を毎日實行してゐる。小出先生曰く、みそぎをやる様になつてから、鼻かぜ位はひかぬが、決して熱の出る様な風はひかないと。因みに小出先生の食養に関する基本的事項を記載せるものに、日本食養立言の一書がある。定價は一圓。御人用の方は本協會まで御申込み下さい。

氣賀林一君が仙人になりそこねた話

さる日、「漢方と漢藥」の主幹氣賀林一君が、東京郊外の某松林に隠棲する朴仙庵こと××△△先生を訪問した。朴仙庵先生は昭和の仙人として、押しも押されぬ、第一人者であつて、やむべしなれ下つた門をくぐる、朴仙庵先生一心に丹を練つてゐる。

やがて丹を練り終へた先生は、氣賀君に酒をすすめた。これなん、朴仙庵先生が手製の不老不死の酒でこそあんめれ。

氣賀君は始めて飲む不老不死の酒に、しばし陶然、桃源の故事など思ひ出し乍ら、そのまま天に昇らん思ひ。

やがてその中に日も暮れたので、氣賀君は朴仙庵先生の許を辭し、京王電車で新宿に出たが、新宿驛の人混を見ると、そのままウウウと唸つて倒れてしまつた。それからは、しばし人事不省。氣が付いてみると、地面に這つてゐる。仙人になつて、天に昇るかと思つてゐた氣賀君は、地に倒れて門歯二枚折つて、しかも鼻血で洋服が紅に染まつた。

目下氣賀君は齒科醫へ通つて義歯を作つてゐるが「インチキ不老不死の酒を作つた朴仙庵先生は、このことを知るや知らずや。」

本協會食養部主任の小出壽先生は、毎朝四時に起床、直ちに明治神宮に參拜し、みそぎの行を毎日實行してゐる。小出先生曰く、みそぎをやる様になつてから、鼻かぜ位はひかぬが、決して熱の出る様な風はひかないと。因みに小出先生の食養に関する基本的事項を記載せるものに、日本食養立言の一書がある。定價は一圓。御人用の方は本協會まで御申込み下さい。

東亞醫學協會幹部 漢方各大家の合議研究製劑

である故原料の精選と處方の的確は 絶對他の追従を許さない。

本劑は一時押への 局處的藥劑ではなく 胃腸の活力を健康と同じ様に恢復させる特點がある あらゆる胃腸藥にも満足しない場合に この皇醫胃腸藥は最後の良藥としておすゝめする。

45錠	.50
105錠	1.00
375錠	3.00

株式會社

東亞醫學協會研究製劑

潔癖症漫筆

荻里人

柳亭種彦の足跡翁記に、所謂ばう類の考證があり、シワン坊、朝寝坊、三日坊、やんちや坊、掃地坊其他が擧げられて居る。餘りに詳述したらべら棒に長くなるから、茲では先づ掃地坊に就て書いて見る。即ち潔癖症に就て、ある。

潔癖は又之を不潔恐怖とも云ふが、常に手を洗ふことが甚だしいので、之を水癖、洗滌癖などとも云ふのである。唯漠然と不潔を恐れる者もあるが、其多くは毒物や腐敗物、又は細菌傳染物などを恐れるから起るもので、其動機は至極簡單のものだが、其れが次第に擴大されると、殆ど際限無き者もあること、豫て御承知の通りである。

即ち其或者は、新聞雑誌の傳染病の記事や、藥の廣告などを見て發病し、其或者は下痢をするとか、又は病人の看護をした位のことから起るものだが、終には之を擴張して、例へば松魚の刺身に中毒したと云ふので、松魚を恐れるやうになり、後では隣家の松魚節の箱の音を迄恐れ、遂には汽車に積んだ松魚節の事から、汽車を迄恐れるやうになると云つたやうなことがあるのである。

かと思ふと、又或者はデストマ蟲のことを知つてから、魚屋の前を通るのを恐れ、延いては佃煮屋や、八百屋迄も恐れるやうになつたと云ふものもあるが、其結果は總ての物に觸れるのを恐れるやうになり、其處でバケツの水を取り代へては、何度も手洗ふ。併し何時迄も不潔物が残つて居るや

うな気がして、到底満足すること出来ぬ。随つて其或者は嚴冬の夜、素裸體になつて、酒精で全身を拭き、又其或者は、夜通し室の眞中に立ち通したと云ふ話さへあるのである。

里人の知人に一人の銀行員があつた。遂隣りの机に居つた人であるが、二三十分置きに能く検温器を握り下げるやうの手つきを何度も繰り返して居ると思つて居ると、今度朝出勤した時、五六歩離れた所から、机の上をジツと眺めて居て、容易に席に着かないのである。愈々以て變だと思つて居る。今度機の上をバタ／＼と掃き出すのである、隣席の人のこの掃き出すは構ひ無しである。

依つて仔細に其手と面とを觀察すると、成程其面は眉目秀麗の貴公子然たるに拘らず、其手は節々立つて紫色を帯び、夏宿敵がきれて居るのである。だん／＼懇意になつてから聞いたことであるが、關東の大震災頃から此癖が募り出し、近頃は始終、手を洗はなければ居られぬ、爲に毎月一ダースの石鹸が無ければ済まされぬと云ふのであつた。畢竟洗つてばかり居るので手先のみが大に發達し、且ガサ／＼になつて、夏でも靴がきれて居るのである。

其處で大に同情したのであるが、既に眉目秀麗の好男子であり、又長唄の一つもやると云ふのであるから、宴會などで大に持てることは事實であつたが、さりとて決して折花攀柳の巷などへは出入しない、頗るの細君孝行であつたのである。否其れは例の潔癖の爲に、さう云ふ所などへは往けなかつたのである。

一時の間に幾度も手を洗ふ。常に他人を穢なかり、之が爲に奴婢を責め罵り怒ること絶えず。能く思案せば此病癒ゆべし。朝夕食する飯米は、糞をコヤンにして成長するなり、菜蔬も亦同じ、魚鳥も穢きものを食ひて生活す。藥種の中にも穢きものあり、是等をのみ喰ひながら、目に見るもののみ穢なるは愚なる事なり。武士たる者は、此病ありては、武事は動まらぬなり。武士は戰にて手足も血まみれに成り、斬りたる首を持ちて、大將の寶座に備へ、味方の人の死骸を取扱ひ、兵糧煮きたる時は、手足を洗ひたる水をも留め置き、砂ごしにして飲食し、濁して水を得ざれば、我小便にて咽を潤すこともあり。されば武士潔癖あらば、穢きものを持ちたる手を少しも洗はずして、其儘にて飲食すべし。如斯すれば、病癒ゆるなり。

實際其通りで、米や野菜のこと迄心配したは、差當り豚肉などは返へたものは無いが、小便を飲んだ位の話は、戰場などではザラに在るのである。否、小便は之を輪廻酒、又は還元湯など云つて、之を藥に用ひたことは、豫て御承知の通りだが、今日だつて尿ホルモンを探つて、之を強精藥にして居ること、今更言ふ迄も無い所である。

支那にも随分似寄りの患者があつたらしく、梁の何終之は、一日の中に洗滌十餘過であつたので、人が之を水淫と稱したさうだが、宗炳之と云ふ男は、訪問客が歸れば、早速其席を拭かせ、又牀を洗はせ、又王昭微と云ふオツツさんは、左右の袖をかき上げ、白紙で手の指を裏ませて居た程だが、偶々家の飼犬が、鳥渡後足を擧げて、柱に失敬して仕舞つたのである。其處で門生をして、直に之を洗はせたのであるが、どうしても氣になる

ので、今度は其柱を削らせ、更に之を削らせたので、遂には柱を取りかへなければならなくなつたと云ふことである。

更に米元章と云ふ兄さんがあつた。屋宇や器具を時々洗はせたのであるが、帽子に少しも塵埃があれば、直ぐに之を濯ぎ、客が歸つた後は、必ず其座席を濯つたと云ふことである。以上は古今事文類聚や代辭篇からの抄出だが、宋の高宗の翰墨志には、手や帽子、ころでは無い、靴を洗つて遂に履け無くしたと云ふ話がある。即ち「世に傳ふ、米帝潔癖有り(中略)朝靴偶々他人の爲に持せられ、心甚だ之を惡む、因つて屢々洗ふ、遂に損じて穿つべからず。靴すら且屢々洗ふ、餘は知んぬ可し矣」

だと言ふのである。所が此人の婿の擧げ方が頗る振つて居る。即ち彼は其婿を擧げに當つて、健康の段拂、字は去塵と云ふのに會つたのであるが、彼は之を解して「既に拂へり矣、又塵を去る、眞に吾に妻(め)あはしたと云ふのだから驚く。

が其れよりも更に面白いのが、其れは芳村梅村の北山醫話にもあるが、驟耕録からの引用で、古今潔を好むの甚だしいのを嘲つたものだが、彼の折花攀柳の巷などは足踏みせぬ里人の知人なども思ひ合されて、仲々に趣のあるものである。即ち、

「毘陵の倪元鎮潔癖有り、一日歌姬賈兒を眷み、別業の中に留宿せしむ。心に其不潔を疑ひ、之をして浴せしむ。既に湯に登つて、手を以て項より踵に至る迄、且捫り且嗅ぐ。捫つて〇に至つて穢氣有り、復浴せしむること凡を再三。東方既に白んで復巫山の夢を作さず(下略)」

東方既に白んでは如何にも傑作だ。

五行説と類推

私は目下、村松正俊君の譯するところのスペンダラー著「西洋の没落」を讀んでゐる。同書は色々の意味で頗る興味のある著述であるが、その中に「死せる形を認識する手段は、數學的な手段は、生きている形を理解する手段は、類推である」と云ふ言葉がある。現代醫學の認識は、數學的な法則によつてゐる。従つて、科學的であると稱せられる。然るに漢方醫學の認識は類推である。故に頗る非科學的であると、非難せられてゐる。今スペンダラーの言葉をもちて、現代醫學と漢方醫學との認識の相異を比較吟味すると、仲々捨てがたい味がある。

五行説が非科學的であるのは、類推によつて説を立てるからだと言ふ人々がある。しかし五行説に現代科學性を要求することは、少し酷だと思ふ。

先日東亞醫學協會の理事會の席で、矢數有道氏と清水藤太郎氏とが、陰陽五行説を中心に華々しい論戰を展開した。矢數氏が如何なる主張をしたか、清水氏が如何なる批判を下したかは、平生の兩氏の主張を知つてゐる方は、直ぐ想像がつく。私共は黙つて兩氏の論戰を參觀してゐた。これは敢へて洞ヶ峠をきめ込んだわけではなく、私共が此の論戰に参加すると、その夜の理事會は、陰陽五行説討論會になつて了ふ危険が多分にあつたからである。

つまれ學界からは迷信のレッテルを貼られ、捨て去られた五行説を、これから科學的に研究してみると云ふ元氣な男が、わが漢方醫學界にゐるといふことは、何と末たのもしいことではないか。それにして、スペンダラーは、うまいことを云つたものだ、私はつくづく感心してゐる。(坂下生)



蘇州國醫醫院に於ける本多精一氏と葉橋泉氏
及び醫院の職員諸氏

(軍服姿が本多氏その左側に立てるは葉橋泉氏)

本誌々代納入者芳名

一金五圓也 東京 乾 勝彦氏
一金二圓四十錢也 東京 櫻庭 富作氏
東京市言問橋際の常泉寺の境内に張仲景の碑がある。この碑の由来は木山荻舟氏の「江戸より東京へ」に出てゐるから、特志家は御讀み願ひたい。左の寫眞は、東亞醫學協會の前身なる偕行學苑の創立五週年を記念して、同協會の理事一同が打揃つて、張仲景の碑の前に於て撮影せるもの。前列右より、木村長久、矢敏道明、大塚敬節、氣賀林一。後列右より龍野一雄、矢野有道、柳谷素靈、清水藤太郎の諸氏。



本協會寄贈書籍

一、醫學綱目(三冊)	東京 本多 精一氏	一、萬病驗方大全(二冊)	東京 本多 精一氏
一、辭源(二冊)	同 本多 精一氏	一、蘇州國醫々院々刊	同 本多 精一氏
一、老子道德經五千言轉語	同 野邊 清氏	一、博大真人全集(二冊)	上海 野邊 清氏
一、軒轅黃帝陰符經附	同 野邊 清氏	一、博大真人全集(二冊)	上海 野邊 清氏
一、文島帝君	同 野邊 清氏	一、軒轅黃帝陰符經附	同 野邊 清氏
一、療道	東京 療道會	一、老子道德經五千言轉語	同 野邊 清氏
一、人間醫學	大阪 人間醫學社	一、太上道德經淺註	同 野邊 清氏
一、神日本	東京 神日本社	一、文島帝君	同 野邊 清氏

紙不足につき向後寄贈の部に於て發送を控へることがあるかも知れません、特に御希望の方は御一報下あれば幸甚です。通常會員は御手数ですが誌代一ヶ年分郵税共一圓二十錢也をお拂込み下さい。

謹告

貴下愈々御清昌國家の爲め慶賀此事に存じ奉り候
さて弊店儀先代清水榮助が紀州より起り明治三年此地を下し藥業を営みし以來茲に滿七十年を経ることを得たるは偏に各位御厚情の賜と深く感銘龍在候今同時世の進運に應じ組織を合名會社に變更し前清水平安堂の營業一切を繼承し藥品部寫眞部協力の上從前通り經營仕り候に付舊に倍し御愛顧の榮を賜り度此段懇願仕り候 敬具
紀元二千六百年三月
創業二千五百三十年(明治三年)
合名 清水平安堂
本社 横濱市中區相生町馬車道
電話長者町二五〇六番
振替東京四四八五番
代表社員 清水榮助 清水美郎 清水透馬

編輯後記

○本誌及び東邦醫學で、問題になつた刺鍼過誤の一件に就き、東邦醫學社東京支局長竹山晋一郎氏の玉稿を頂戴した。之は本誌前號の報導に對する竹山氏の釋明である
○本月の例會は本多精一氏に、滯支四ヶ年の豊富な土産話を聴く會とした。當日は、珍らしい書籍その他のものも供覽する筈であり、遠慮なく御來聴あらん事を望む。